

震災からの復旧と図書館

気仙沼市教育委員会教育長 白幡 勝美

1 東北地方東日本太平洋沖地震津波の発生について

平成 23 年 3 月 11 日、東日本の太平洋沿岸は貞観 11 年以来とも言われる大津波に襲われました。気仙沼市をはじめ海岸一帯は、全て電気は消え、水道が止まり、ガソリンも無く、道路はガレキで溢れ、学校をはじめ多くの組織の一つ一つが分断され孤立したのです。

身の回りにいる人同士で、小コミュニティでの結びつきの中で互いを救い合いながら、救援を待ったのです。そして、気仙沼市は自衛隊や東京消防庁、県警察等の外、県内外から、また海外からの支援を頂きながら復旧に向かうことになったのですが、死亡者、行方不明者は各々 1034 人(身元不明者 53 人)、333 人(平成 24 年 5 月 10 日現在)でした。産業の被害でみると、事業所の約 4 分の 3 が失われ、被災従業員は 30232 人中、25236 人と、83%にものぼり、漁業基地として自慢であった船の被災は 3566 隻中、約 3000 隻にも達していたのです。



写真 1 打ち上げられた 第 18 共徳丸

2 情報の大切さ

このような中、私共が思い知ったのは情報の大切さでした、電話、TV、インターネット等殆どの電気を使う通信情報網が地震の発生と同時に途絶えてしまったのです。頼みの携帯も極度に繋がり難くなり、やがて全く接続不能に陥りました。中継局のバッテリーが切れてしまったのです。私たちが得ることが出来る情報は、

前述のように移動の極度に制限された中で、しかも、それぞれの目に入るものだけとなってしまいました。それでも、次第に通信も回復しはじめ、近隣の市町村の被害状況も入ってくるようになりました。三陸新報という地域の新聞があって、B4印刷に手書のものがコピーされ、極めて限られた範囲ではありましたが、配られ、県内の新聞や大手の新聞が避難所には届けられるようになりました。奇妙なことに、一時的には避難所に最も情報があるような状態になりました。そのことによって「3月11日のあの時に遡ってなにが起きていたのか知りたい」そのような願望はある程度満たされるようになってきたのですが、それでも、一般市民にとっては、震災や津波について納得できるまでの情報や知識は得られなかったのです。

3 最も重要なインフラとしての図書館

私達はそのとき、津波に関するまとまった情報や、今を生きるために、何か役立つ本が欲しかったのです。そして、そのこと等を図書館に頼りたかったのです。また、瓦礫だらけの、食べ物をはじめとする物不足の環境下であって、多くの市民は、落ちつける、人間らしく感じられる居場所がどうしても欲しくなっていました。

図書館は電気や水道などと同様に社会を支える最もベーシックなところにある一つの重要なインフラであり、災害時には一層その重要性が増す施設であることに、私達は改めて気付かされたのでした。

しかしながら、気仙沼市の図書館機能の中心である気仙沼図書館も大きな被害を受けていました。震度6弱の強い揺れによって、1階と2階の境目（2階のフロア部分）で全ての柱が破断してしまっただけです。2階の蔵書倉をはじめ、閲覧室等の機能が全て失われ、戸棚の本は床に散乱し、手のつけようのない状態になりました。更には、貸し出していた12000冊の本が流失してしまいました。なにより図書館を管理するコンピュータが稼働できなくなっていました。

一方、図書館職員も震災発生直後は市全体の緊急事態に対応するだけでした。



写真2 地震直後の気仙沼図書館

しかし、震災から1週間後、気仙沼市は職員の対応のあり方を検討し、その中で、「各図書館職員は炊き出しや避難所等の支援に当たるのではなく、図書館の復旧にこそ当たるべき」ということになりました。何一つ復旧が進んでいないようにみえる段階であっても「図書館の整備、開館を早めることこそ、被災地の復興にとっても重要なものである」との意見が大勢を占めていたのです。

震災1週間後から八木徹館長をはじめとする気仙沼図書館職員の奮闘が始まったのです。「2階の部屋が使えなくても、児童館（児童用閲覧室）が使えなくても別な工夫があるのではないか。コンピュータが動かなくても、貸し出し出来なくてもいいのではないか。とにかく図書館を動かそう」それが方針でした。

そして2週間後の3月30日に、被災地では最も早く再開館にこぎつけました。

ガレキが多く、通行禁止箇所が数多く残り、交通の便は極めて悪かったにも関わらず、開館のその日から多くの市民の皆さんに利用して頂き、喜んで頂きました。

4 全国の図書館関係のみなさん、そして第四の”助”



写真3 日本図書館協会 読み聞かせ

4月22日から、日本図書館協会常務理事の西野一夫さんをはじめとする10名余の皆さんが気仙沼図書館において読み聞かせのボランティア活動を行って下さいました。心に量り知れない痛手を受けた子供達が沢山いることが分かっているにもかかわらず、職員は疲れ、時間的ゆとりもなく、本を読んであげることが出来ないう状態でした。

お話を聞いて、子供達がどんなに喜んだか知りませんが、本の内容はもとより、話しかけられた一声一声を子供達は決して忘れず、おそらく一生の宝物として大切にしていけるに違いありません。

やがて、日本図書館協会からの3000冊をはじめ、日本出版クラブ、NPO法人「人間の安全保障フォーラム」(HSP)をはじめ各方面の多くの方々からも沢山の本が寄贈され、図書館の機能が確保されていきました。

本の貸し出しや図書館間での相互貸借が出来るようになったのは6月1日でした。震災直後、避難民は2万人、避難所は100箇所にもなりました。緊急の短い期間を過ごすためだけの避難所は漸次閉じられていきますが、それでも多くの避難者が学校や公民館等で厳しい日を過ごすことになりました、そこには大人も子供も高齢の方もいたわけで、そこに本を提供することが急務となりました。



写真4 おおぞら文庫

市内を回っていた自慢の巡回バスも被災し、使用不能になり、図書館の前で書棚の代わりに使っている状態でした。それでもなんとか、1台残った図書館の軽自動車で、出来る範囲で本を配っていたのですが、日本図書館協会を通して、静岡県三島市から図書館車ジンタ号が、神戸市子供環境フォーラムから神戸号が貸与されました。

また、ユネスコ協会連盟を通してテトラパック社から図書館車が寄贈され、小学校を含めて、避難所、福祉施設に本を届けることができるようになりました。

同様に、平成24年5月になり、ユネスコ協会連盟を通し、トレンドマイクロ社から「おおぞら号」が寄贈されました。



写真5 ジンタ号のまえで

このようにして図書館の機能が回復してきたのです。阪神淡路大震災以来、災害では自助、共助、公助が大切と言われてきましたが、図書館の復旧のためには、全国の図書館関係の皆さんや、第四の“助”とでもいふべきNPO、NGOの組織やボランティア団体等の力が極めて大きかったのです。気仙沼図書館の復旧は日本全国の図書館関係、世界の多くの方々のご支援があって、はじめて可能だったのです。

5 復興をもたらす図書館、知識基盤社会の中での図書館

気仙沼図書館は一小学校に篤志家が本を寄附したことに始まり、多くの賛同者が出、やがて町の図書館になったもので、正に市民の熱意があつてのものでした。

気仙沼図書館を中心に述べてきましたが、気仙沼市の各図書館はこのような市民の図書館に寄せる思いに応え、来訪する市民の多様なニーズに答え、喜んでもらえる読書環境を提供し、新しい文化創造の拠点となるよう努めていきたいとしています。文字を通しての情報は時代を超越し、世界の様々な垣根を越え、地域や日本の次世代を育み、地域に震災からの確かな復興と力強い持続可能性をもたらすはずで

そのため、気仙沼市は被災した図書館を再建し、その中に児童館を復活させて幼児や小学生を対象とした活動の場を確保し、一生にわたる読書活動の基礎をしっかりと培うこととしています。そして中・高校生には多感な時代に豊かな情操と知識・情報を本を読むことを通して、自ら得させたいものであります。大人のニーズは多種多様であります。蔵書の確保、利用者の要望を活かした選書や他図書館との相互貸借によって、それに応えるしくみとしています。

また、読書活動は市の中心施設を充実するだけでなく、市民の生活にできるだけ近い施設にそのための空間を確保し、日常化を目指していくことも大切になっています。その一つの理由は高齢者が増えていることであり、交通手段がない子供達が両親の共働きによって一人である割合が多くなっているからです。読書のための空間の確保は、読書を仲立ちとして、孤立しがちな人と人とを読書を通して結びつけ、コミュニティを一層活発化させ、新しい展望を地域にもたらしめます。

そのため本市では図書館バスの運行等により図書館と学校、幼稚園、保育所、福祉施設、公民館を結び、身近な場所で本を利用できるシステムを発展・維持していこうとしています。知識基盤社会と言われる中で、地域にとっては図書館こそ、その拠点になりうる施設です。何と云っても図書館の持つ本を中心とした知識・情報の集積には膨大なものがあるからです。

これが活かされるためには、集積した知識・情報とその活用の方法を誰よりも、図書館



職員が知っている必要があります。知識基盤社会を支える人材の育成の視点からも図書館の機能を直接担う立場にある司書の育成を図ることが必要になっています。

本市の図書館では、担当を設け、市民に働きかける事業を継続しています。今年出来る範囲に限りがありますが、講師を選んでの読書会や大学との連携による事業を行う予定です。更に子供達への幅広い

写真6 トレンドマイクロ実験・工作教室 読書活動を促し、また逆にそれによって読書が支えられるためにも実験・工作教室の開催等を被災前と同様に取り組んでいます。

なお、知識基盤社会であっても、気仙沼市には大学がないことから、本市では大学機能を取り入れるため、大学と連携協定等を結び、サテライトを設置して頂いています。これまで宮城教育大学、放送大学のものがありましたが、東京水産大学が平成24年度から加わりました。このようなサテライトの機能が発揮されるためには、やはり、蓄積した情報の大きさ、学びのための情報ネットワークをもつ図書館の関わりが求められます。震災前の気仙沼図書館はその機能を果たしてしまっていたので、これも図書館の再建にあたって重視していきます。